

リレーコラム

統計情報の価値

農村の実態調査と農業統計の吟味。研究の素材の大半はこのふたつのルートから得られる。これが農業経済学の特徴だと思う。私自身、多くの農村を訪ねた経験があり、それが縁でいまもつながりのある農家は何人もいる。数字がびっしりの統計書に向き合って悪戦苦闘した思い出も少なくない。近年は電子的な媒体によって入手できる統計情報も少なくないが、かつては統計書からの転記作業が仕事のスタートだった。私の所属した研究室では、統計転記のための用紙を特注で確保していた。

調査で農家を訪ねる目的は、何よりも数字だけでは知ることができない情報を得るためである。なかでも農家がどのように考え、行動しているかを聞くことが大切である。そのことで統計数字の意味するところが明らかになる場合もある。もっとも、農家調査から得られる情報はあくまでも点としての情報である。安易な一般化は禁物である。やはり全体像に関する情報とセットで実態に接近する必要がある。

振り返ってみて、統計の数値そのものから人の目を引くような新事実の発見が行われるのは希ではないかと思う。たしかに全体像を確認するうえで必須ではあるものの、統計情報そのもので新奇性のある報告が生まれることはそれほどない。これが統計書を前に40年近く仕事を続けてきた一研究者としての実感である。そんな私にも、新鮮な情報だと感じた経験がないわけではない。ほかならぬ酪農についてである。

初回の酪農全国基礎調査が中央酪農会議によって行われたのは平成3年。私も調査の設計や結果の分析のお手伝いをさせていただいた。酪農全国基礎調査は通常の意味での統計調査とは異なる。けれども、国内のすべての酪農経営を対象として実施されたこと、そして81%の高い回収率であったことから、日本の酪農経営の全体像に関する貴重な情報として幅広く活用された。初めての調査であったことに加えて、従来からの統計では把握できない情報の確保に主眼を置いたため、得られた大半のデータが新鮮な情報と言ってよいほどであった。

ひとつだけ具体例をあげておく。糞尿に起因する問題の発生の有無について、問題の具体的な中身と合わせて尋ねる項目があった。北海道で37%、都府県で45%の酪農経営が何らかの問題が発生していると回答した。新鮮と言うよりも、半ば驚きの結果である。当時は都市周辺の畜舎について臭気やハエの発生が問題視されることが多く、ある程度の回答率になるとの予想はあった。実際には、都府県で半数近くが、北海道でも3分の1以上が問題ありと回答したわけである。正直な酪農家との印象を強くするとともに、背景にある深い悩みを垣間見る思いであった。

北海道の中山間地域、つまり道東や道北の酪農地帯では、16%の酪農家が水質汚染の問題が発生と回答している。この結果も強い印象を残した。事例的に指摘されてはいたが、糞尿や堆肥の河川や海域への流入が相当に広がりを持つ現象であることを、酪農全国基礎調査が初めて明らかにしたと言ってよい。全体像を把握する統計的な情報ならではの発見である。念のため申し添えておかなければ、これは20年前の実態である。現在同じ調査を行うとすれば、回答率は激減しているはずである。平成11年に施行された家畜排せつ物法のもとで糞尿処理の適正化が図られているからである。

統計情報そのものは平凡である場合でも、少し切り口を変えて眺めてみることで農業に対する認識が新たになる場合もある。こんなかたちで統計と農業のつながりを提示することも、

生源寺 眞一 (しょうげんじ しんいち)

名古屋大学大学院生命農学研究科教授。
中央酪農会議理事。
1951年愛知県生まれ。
東京大学農学部農業経済学科卒。
主な著書に『現代日本の農政改革』(東大出版会)、『改革時代の農業政策』(農林統計出版)、『日本農業の真実』(ちくま新書)など。



農業経済学の仕事のひとつではないかと思う。学術論文にはならない。むしろ、日頃の研究活動のいわば副産物として、社会に情報を提供するといったところだろうか。副産物などと表現したが、小難しい理屈をこねた論文よりも、単純でも目から鱗の情報のほうが多くの人々にはずっと有益かもしれない。

例えば酪農経営の規模を評価する切り口を考えてみよう。酪農の規模そのものは、搾乳牛の頭数で表すのがいちばんポピュラーな方法であろう。酪農の関係者のあいだでは、日本全体の平均で40頭程度にまで拡大したことが広く知られている。すでにヨーロッパクラスを凌駕する規模だという評価もある。これはヨーロッパの統計と日本の統計の比較という切り口によって得られた認識にほかならない。では、国内で酪農以外の農業と比較してみたらどうだろうか。同じ比較であれば、何よりも日本農業の代表である稲作と比べることが人々の関心を引くはずだ。

ふたつの方法がある。ひとつは所得を物差しにする比較であり、もうひとつは労働時間を物差しにする比較である。手元にある統計書は「畜産物生産費」と「米及び小麦の生産費」の平成20年版。まずはそれぞれの所得は、酪農が搾乳牛1頭当たりで12万7千円、稲作が10アール当たり2万9千円である。ということは、所得を生むパワーを基準として、搾乳牛1頭は稲作の44アールに相当するわけである(12万7千円÷2万9千円)。つまり搾乳牛で平均40頭規模の日本酪農は、稲作では17.6ヘクタールの規模に相当することがわかる。

実は、労働時間つまり農業経営に投入される労働の量を尺度にした場合にも、ほぼ同じ結果が得られる。1頭当たり労働時間110時間を10アール当たり労働時間27時間で割ると4.1。40頭ならば16.4ヘクタールというわけである。こうして得られた17ヘクタール前後の規模の稲作は、間違いなく日本のトップクラスの経営である。水田の4割程度で生産調整が行われている点を加味するならば、水田作経営の面積としては30ヘクタール弱である。逆に日本の平均規模の1ヘクタールの稲作は、搾乳牛で2頭の酪農という計算になる。とても経営として維持できる規模ではない。

酪農の平均は稲作のトップクラスである。この事実をもっと多くの人に知っていただく必要がある。日本の農業を一律に論じることはできないのである。もっと言うならば、一律に論じることは危険ですらある。水田農業からの横並び感覚で酪農政策を論じられてはたまらない。こうした認識を深めるためにも、統計データに隠された情報の発掘には、また、そのためのちょっとしたアイデアには意味があると思う。